

## ビキニ事件は終わっていない！

高知の国賠訴訟一審判決、多数の元船乗りの  
被ばくを認め、政府・国会へ救済検討も促す

太平洋のビキニ環礁を中心に米国が 1954 年に繰り返し行った水爆実験で被ばくしたのは第五福竜丸だけではないと、同じ周辺海域で操業中に被災し後に健康被害で苦しんできた高知県のマグロ漁船元船員や遺族ら 45 人が国家賠償を求めて 2 年前、提訴した「ビキニ国賠訴訟」の判決が 2018 年 7 月 20 日、高知地裁(西村修裁判長)でありました。民法の規定で損害賠償請求権は消滅しているとして原告の請求が棄却されたのは残念でしたが、注目される判断も示されました。ポイントは 2 つ。多くの船乗りたちが被ばくした事実を司法として初めて認めたことと、長年にわたり顧みられることのなかった被災者たちの救済検討を政府・国会に促したことです。

この裁判は、高知県の高校教師だった山下正寿さん（現太平洋核被災支援センター事務局長）と地元高校生たちの 30 年以上に及ぶ被害者発掘の努力と、裁判に打って出た被災元船員たちの勇気、支援者らのバックアップで起こされました。一部高齢者らを除く約 3 分の 2 の原告は高松高裁に控訴しました。闘いは続きます。しかも世界的意義を持つ地球市民の闘いです。

なぜか。第 1。第五福竜丸の船員 23 人の「死の灰」による被ばくと久保山愛吉さんの死、放射能汚染マグロの大量廃棄騒動と続いたビキニ事件は、市民社会に核兵器の恐ろしさを再認識させ、被爆国から原水爆禁止運動が世界中に広がっていく出発点となった。第 2。原水禁運動の発展を恐れた日米両政府はわずかな見舞金で「政治決着」させ、延べ約 1 千隻とも推定される他の船舶についてはまともな放射能影響検査もせず、被災船員らを放置し続けた。世界中で「核」を持つ権力者たちに共通する核被害隠ぺいの正体を暴きだす裁判闘争だ。第 3。裁判途中の 2017 年 7 月、核兵器禁止条約が国連加盟国の 3 分の 2 近い多数の賛成で採択された。条約は核兵器を違法化し、第 6 条では「被害者に対する援助及び環境の回復」を締約国に義務付けた。「被害者」には核実験により影響を受けた者も含まれると規定された。いまだ条約に背を向ける被爆国政府に核兵器禁止条約署名を迫る闘い、米ロはじめ核超大国が進めている危険な核軍拡との闘いに直結する。

高知地裁判決（全文 100 頁）を読むと、「争点に対する（裁判所の）判断」では、ビキニ事件の歴史的経緯、見放されてきた第五福竜丸以外の無数の被災船員らの存在などが、ほとんど原告団提出の証拠と主張通りに事実認定されています。原告一人ひとりが語った乗船当時の諸環境、その後の体調等も検証されています。そして、米国による核兵器使用によって被害を受けたという共通性があり、核実験に使用された水爆の方が原爆より遥かに強力で広範囲に放射性降下物を撒き散らしたことが判明しているのだから、被災船員の健康被害の救済を一との原告らの訴えに理解を示し、被爆者援護法のような依るべき法律もいまだなく、因果関係の立証の困難性を踏まえ、救済の必要性について行政府と立法府に検討を求めている

ます。

被告の国側は被災船員の被ばくの事実を徹頭徹尾否定しかかってきました。裁判最初の反論（2016年9月29日付第1準備書面）では、「第五福竜丸の漁船員に放射線被曝した者がいたことは認め、その余は不知」の一言です。福竜丸船員にも被ばくしなかった者がいたとも言いたげな不遜な主張でした。原告側は早期救済策として、裁判と並行して一般の労災保険にあたる船員保険の適用を求める取り組みもしてきましたが、ここでも国側は元船員への聞き取りさえせぬまま申請を却下しました。内部被ばくも無視しています。こうした中、司法に「被ばくの事実」を認めさせた意義は大きい。控訴審での闘いはさらに激烈なものになるでしょう。原告側は被災船員救済のための新法（仮称「核実験被災船員救済特別措置法」）の制定も目指しています。



これからが正念場です。非核の政府を求める京都の会からお願いがあります。闘いに勝利するためには、もっともっと理解者を増やすこと、財政面で後押しすることなどが重要です。どうか支援の輪に加わってください。やりがいのある応援です。核兵器禁止条約の成立を後押しした地球市民社会とスクラムを組み、**ビキニ事件は終わっていない**ことを世界中に知らせる中で、日本政府に被災者救済を迫っていくのです。

とりあえず、この裁判闘争が行われていることを初めて知った方は、ぜひ一人でも多くの方に事実を伝え広げてください。

もう少し詳しく闘いの中身を知りたい方は、太平洋核被災支援センターHPをのぞいてみてください。HPアドレスは <http://bikini-kakuhisai.jet55.com/> です。

以上

長谷川千秋（常任世話人）